

第1章

コロナの悪魔化とプーチンの悪魔化

— CIAの恐るべきメディア支配「モッキンバード作戦」



「アメリカはその汚い手を引っ込めろ」と指弾する、トルコの内務大臣

<https://www.rt.com/news/570910-t%C3%BCrkiye-minister-us-ambassador/>

1

前巻の最終章では、次の記事を紹介し、サーシャ・ラティポワ(Sasha Latypova)という女性、「国防総省はCOVID-19政策を最初からすべて管理統制しており、一般に提供された情報は隠ぺい工作であった」という驚くべき主張をしていることを紹介しました。

* SHOCKING FOIA DOCUMENTS: COVID Pandemic Was a Secret DoD Operation dating back to Obama Administration (衝撃のFOIA文書 COVIDパンデミックは、オバマ政権時代にさかのぼる国防総省の秘密作戦であった)
<https://alzhacker.com/shocking-foia-documents/>

彼女は、25年来、製薬業に携たづなわってきました。そしてある時、今のコロナ騒さわぎに不審なところがあることに気づいたので、情報公開法(FOIA)を通じてこの間の経過を調べてみたいと思ったそうです。こうして入手した文書から、COVID-19の大流行に対する政府の役割を調査した結果、それが「オバマ政権時代にさかのぼる国防総省の秘密作戦であった」ことを発見したと言っているのです。

2

そこで早速その紹介に移りたいのですが、そう思っていた矢先(二月六日)にトルコとシリ

アで大地震が起き、今日二月九日の朝にはトルコ・シリア両国の死者は9000人以上にも昇っています。(二〇二三年三月二〇日時点で、両国の死者数は5万6000人以上となった)

かつて福島原発事故が起きたとき、ベンジャミン・フルフォードという日本に帰化した人物が「東日本大震災はアメリカによる人工地震だったのではないか」と外国人記者クラブで発言して話題を呼びました。

事の真相は分かりませんが、アメリカ国防総省がそういう「気象兵器」研究をアラスカで展開してきたことだけは確実なようです(軍事プログラムH A A R P「高周波活性オーロラ調査プログラム」)。

そこで急に、このシリアやトルコにおける大地震が心配になりました。シリアやトルコはアメリカが主導するロシアへの経済制裁に賛成していませんからです。先日トルコの内務大臣が次のように発言したことが話題を呼んでいました。

* US should get 'filthy hands' off Turkey - minister (米国はトルコから「汚い手」を引っ込めろ、と大臣)
<https://www.rt.com/news/570910-1-%C3%BCrkiye-minister-us-ambassador/> RT, 3 Feb, 2023

つまり、スレイマン・ソイル内務大臣は、イスタンブールの「アメリカ領事館閉鎖問題」で、米国がトルコを傷つけるために策動していると非難していたのです。

この内務大臣の発言は、米国とEU諸国が「安全上の配慮」という口実でイスタンブールの領事館を一時的に閉鎖することを決めた翌日に出てきたものです。

トルコは特に、NATO加盟国でありながらロシアにたいする経済制裁に加わっていませんし、またフィンランドやスウェーデンがNATOに加盟したいと言っても、それに反対してきましたから、バイデン政権やEU幹部の怒りを買っていました。

というのはNATO加盟は、「全員一致制」ですから、そのなかの1カ国でも反対すれば加盟できない仕組みになっているからです。

それでアメリカとEU諸国は、トルコに圧力をかけるために、「安全上の配慮」という口実で、有名な観光地イスタンブールの領事館を一時的に閉鎖することを決めたのです。

しかし、欧米各国はテロの脅威を理由に領事館を閉鎖し、自国民にトルコの観光スポットを避けるよう勧告したのですから、観光を大きな収入源にしているトルコにとっては、これは明らかに「経済制裁」「トルコへの攻撃」でした。

私が「トルコへの人工地震か？」と心配したのは、このような事情がありました。アメリカの言う「安全保障上の配慮」というのは、トルコに地震が起きること（あるいは「起

こす」ことを事前に知っていたということではないか、と思っただからです。

なにしろ、この地震が起きたのは、内務大臣がそのような発言をした直後でしたし、「テロの脅威」を口実に領事館を閉鎖するというのも、実に不自然です。トルコがテロ攻撃を受けるさし迫った理由がありませんから、これは事前にアメリカが地震が起きることを知っていたのではないかとしか考えられません。

4

本章を書き出した早々に話が横道にそれたので本題に戻します。

前巻の最終章は、先述のように、サーシャ・ラティポワ (Sasha Latypova) という女性が、FOIA「情報公開法」に基づいて入手した文書をもとに、「コロナ騒ぎは、オバマ政権時代にさかのぼる国防総省の秘密作戦であった」という衝撃的発表をしたことを紹介しました。

* SHOCKING FOIA DOCUMENTS: COVID Pandemic Was a Secret DoD Operation dating back to Obama Administration
<https://alzhacker.com/shocking-foia-documents/>

この記事はキム・イバーセン (Kim Iversen) という若い女性による右記インタビュー記事



キム・イバーセンがサーシャ・ラティポワにインタビュー「コロナは国防総省の軍事作戦だった」

の後半20分だったので、よく調べてみると、これよりも図表を駆使した、さらに充実した50分弱のインタビュー記事があることを発見しました。

* Corona Investigative Committee: Alexandra (Sasha) Latypova - Session 140: Resolution 53/144 (コロナ調査委員会: 話題提供者アレキサンドラ・サーシャ・ラティポワ、第140回委員会。議題53/144: 英語)
<https://www.bitchute.com/video/45Z6QcVpkJsi/> / February 1st, 2023

幸いにもこのインタビューには、「Alzhacker」というサイトに和訳が載っていることが分かりましたので、その和訳を元に、ラティポワの衝撃的報告を紹介することにします。

* サーシャ・ラティポワ「セッション140」
<https://alzhacker.com/alexandra-sasha-latypova-session-140-resolution-53-144-en/> / 2023/02/04

しかし、この和訳は、Oterという文字起こしソフトを使ってインタビューを文字にし、それをDeepLという

翻訳ソフトで機械翻訳をしたものをそのまま載せてあるので、ところどころ意味不明のところがあります。

そこで、ここでは前後の文脈から判断して私が理解したかぎりのものを皆さんにお伝えしたいと思います（それにしても、このような二重の作業をしていただいたAizhacker氏に、まず感謝しなければなりません）。

とはいえ、5分インタビューの全てをお伝えすることはできませんので、私の目を惹いたところのみを紹介することになります。

5

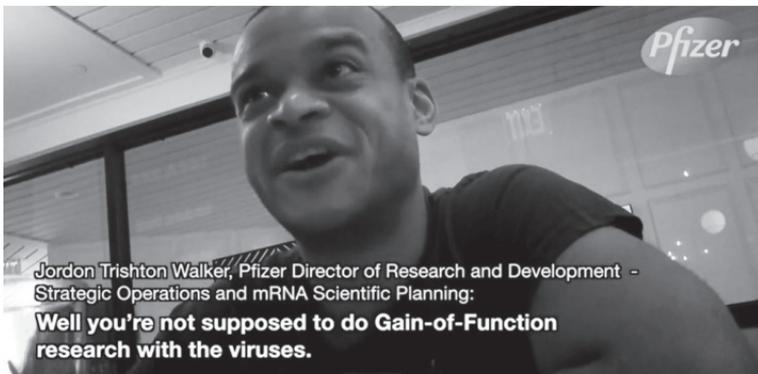
しかし、その前に、どうしてもあらかじめ、紹介しておきたい事実があります。それは、「ワクチン製薬会社ファイザーが、儲けのために変異株をつくり出している」という、という、という驚くべきニュースです。

* The Collapse of the COVID Narrative. Will anyone notice?

「Covid言説が崩壊している。しかし、それに誰か気づくだろうか」

<http://timmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1271.html> (『翻訳NEWS』2023/02/14)

このニュースはすでに『謎解き物語2』（203頁）でも紹介したように、ポール・クレイグ・



Jordan Trishon Walker, Pfizer Director of Research and Development - Strategic Operations and mRNA Scientific Planning:

Well you're not supposed to do Gain-of-Function research with the viruses.

隠し撮りをされていることを知らずに、思わず「変異株をつくっている」と口を滑らしてしまったファイザー社の研究開発部長、ジョーダン・ウォーカー（Jordan T Walker）

https://rwmalonemd.substack.com/p/project-veritas-has-broken-pfizers?utm_source=substack&utm_medium=email#play

ロバーツ元財務次官のブログに載っていたものです。それは次のように始まっていました。

現代の最も偉大な真実の語り手である告発グループ「プロジェクト・ベリタス」は、ファイザー社の幹部ジョーダン・トリシュトン・ウォーカー（Jordan Trishon Walker）をビデオ録画した。

ウォーカーはファイザーの研究開発部長であり、戦略的作戦「mRNA科学」の立案者である。ビデオでは、その彼が、「ファイザー社が政府の規制機関を完全に取り込んで、社がワクチン販売から無限の利益を得られるよう、ウイルスを変異させる」という計画について説明している。

御覧のとおり、ファイザー社は新しいワクチンを売るためにコロナウイルスの変異株をつくりだしていたのです。

ところが日本の大手メディアは、「新型コロナウイルスは

次々と変異株をつくり出すから恐ろしい。だからワクチンを！」という言説をふりまいて、製薬企業や岸田政権の恐怖作戦に加担してきました。

これにたいして、製薬会社や医療業界で臨床技術の開発・検証、規制当局の薬品承認などに焦点を当てた専門的な経験を積んできたラティ・ポワ女史は、先に紹介したインタビューで次のように発言しています。

そうですね、プロジェクト・ベリタスについて簡単にお話ししますと、ご存知のように、これは話題になったばかりですが、その続編ビデオも見ました。

最初のビデオでは、この男がベリタスのインタビュで自社ファイザーのことを自慢しつつ、ファイザー社はウイルスを変異させていると言っているんですが、「これは『機能獲得』なのか」と聞かれると、「ああ、いやいや、これは『指向性進化』と呼ばれているんだ」と言っています。つまり、同じものに違う名前をつけているのです。彼らはウイルスを変異させて、何が起るかを予測し、そのためのワクチンを作っていたのです。

この話を聞いたとき、私にはとても馴染みのある言葉だと思いました。なぜなら、これは、実は秘密でもなんでもないので、至るところで表に出ています。BARDA（生物医学高等研究開発局）、DARPA（国防高等研究計画局）、NIH（アメリカ国立衛生研究所）、DOD（国防総省）、産業界、つまりあらゆる場所で、あらゆる文書で公に発表している言

葉なのです。

彼らは同じような言葉を使っています。彼らは皆、このことについて話しています。ですから、秘密でもなんでもありません。公の場に出ているのです。ただ、注意を払うだけでいいんです。

6

これを読むと、関係当局および製薬業界では「新型コロナウイルスの変異株をつくっていることは誰でも知っていることだ」というのですから驚きました。

しかも業界用語では、これを「機能獲得 (gain-of-function)」とは言わずに、「指向性進化 (directed evolution)」と呼んでいるというのですから二重の驚きでした。同じものに違う名前をつけて平然としているのです。

ラティポワ女史は、上記の説明に、更に付け加えて次のようにも言っています。(傍線は寺島)

さて、なぜ彼らはこんなことをするのでしょうか。

プロバガンダ、軍事化されたプロバガンダ、第5世代戦争の一環として、人々に広く嘘をつき、軍事情報部が使うさまざまなテクニックで人々を恐怖に陥れるためにやっているのです。

非常に巧妙で、明らかに全ての主流メディアを取り込んで、「モッキンバード作戦」と同じメッセージを伝えることができるのですが、これはプロパガンダなのです。

まず人々を恐怖に陥れ、「ウイルスの致死性と感染性を同時に高める」などということがあり得ると信じ込ませるように設計されています。しかし、これは不可能なことなのです。自然界の法則に反しています。こんなことは不可能なのですが、彼らは人々にそう信じさせたいのです。

右で「モッキンバード作戦」という用語が出てきます。「モッキンバード (mockingbird)」とはスズメ科の鳥なのですが、生物や楽器、機械の音などの鳴き真似が得意なことから、日本では「ものまね鳥」と言われています。

アメリカは自分の思いどおりの世論をつくりだすために、ずっと以前から、この鳥の名前をとった「モッキンバード作戦」を始めていました。彼らの望む思想をモノマネするかのように発信してくれる広報メディアを作ろうとしてきたのです。

7

この実態は、櫻井ジャーナル(2022/05/04)によれば次のとおりです。

今でもアメリカに「言論の自由」があると信じている日本人もいるようだが、組織としてのメディアは昔からプロパガンダ機関にすぎない。

ワシントン・ポスト紙の記者として「ウォーターゲート事件」を暴いたカール・バーンスタインは、リチャード・ニクソン大統領が辞任した3年後の一九七七年にワシントン・ポスト紙を辞め、「CIAとメディア」という記事をローリング・ストーン誌に書いている

その記事によると、一九七七年までの20年間にCIAの任務を秘密裏に実行していたジャーナリストは400名以上に達し、CIAの高官は「一九五〇年から六六年にかけてニューヨーク・タイムズ紙は少なくとも10名の工作員に架空の肩書きを提供した」とバーンスタインに語ったという。

(Carl Bernstein, "CIA and the Media," Rolling Stone, October 20, 1977)

またデボラ・デイビスが書いた『キャサリン・ザ・グレート』も、CIAによるメディア支配の一端を明らかにしている。彼女によると、第2次世界大戦が終わって間もない一九四八年頃にアメリカでは「モッキンバード」と呼ばれる情報操作プロジェクトがスタートしている。そのプロジェクトを指揮していたのは次の4人。

- アレン・ダレス(第2次世界大戦中からアメリカによる破壊活動を指揮していたCIA長官)
- フランク・ウィズナー(ダレスの側近で戦後に極秘の破壊工作機関OPCを率いていた)
- リチャード・ヘルムズ(ダレスの側近で後にCIA長官に就任する)
- フィリップ・グラハム(ワシントン・ポスト紙の社主)

(Deborah Davis, "Katharine the Great," Harcourt Brace Jovanovich, 1979)

しかし、CIAのメディア支配はアメリカ国内だけに留まっただけではありません。その実態を先述の櫻井ジャーナルは、さらに次のように説明しています。

CIAのメディア支配はアメリカ国内に留まらない。

例えば、フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトウング(FAZ)紙の編集者だったウド・ウルフコテは、二〇一四年二月、ドイツにおけるCIAとメディアとの関係をテーマにした本を出版、その中で多くの国のジャーナリストがCIAに買収されていて、そうした工作が危険な状況を作り出していると告発している。 <https://www.youtube.com/watch?v=0I5BZCUIR4d>

彼によると、CIAに買収されたジャーナリストは、人びとがロシアに敵意を持つように誘導するプロパガンダを展開し、ロシアとの戦争へと導いて、引き返すことのできないところまで来ているとしていた。そして現在、アメリカやその従属国はロシアとの戦争をウクライナで事実上、始めている。

この、FAZ編集者ウド・ウルフコテが「ドイツにおけるCIAとメディアとの関係をテーマにした本を出版した」二〇一四年は、アメリカがウクライナでクーデター政権をつくりだした年であることに注目してください。